人間行動学科　社会学コース

社会学的アンビバレンスの概念を用いた大学生のきょうだい研究
：家事をめぐるきょうだいの語りから

文学部　2023 年度

Ａ２０ＬＡ１０７

ふくい　わたる
福井　航

人間行動学科　社会学コース

社会学的アンビバレンスの概念を用いた大学生のきょうだい研究
：家事をめぐるきょうだいの語りから

文学部　2023 年度

Ａ２０ＬＡ１０７

ふくい　わたる
福井　航

目次

1　はじめに 1
1.1　本論文の問い 1
1.2　研究の背景 1
2　先行研究の検討 4
2.1　青年期のきょうだい関係に関わる要因 4
2.2　家庭における家事分担に関わる要因 6
3　理論的枠組み 8
3.1　Merton らによる社会学的アンビバレンス概念 8
3.2　Connidis らによる概念の修正 9
3.3　得られる示唆 10
4　調査概要 11
4.1　方法 11
4.2　インタビューの概要 13
5　調査結果 14
5.1　家事の遂行状況 14
5.2　きょうだいの家事に対する評価 20
5.3　社会学的アンビバレンスの視点から 25
6　考察 27
6.1　参照されていた規範 27
6.2　どのような場合に規範が対立していたか 28
7　結論 29
[文献] 31

1　はじめに

1.1　本論文の問い

本論文では，ともに大学生であり同じ世帯に暮らすきょうだい（大学生きょうだい）が，世帯の家事に対するお互いの役割をどのように見ているのかを調べる．特に，それぞれがすべきこと，しなくてもよいことを考える際に，どのような規範を参照しているのかに着目する．

「きょうだい」というと，血のつながった間柄はもちろん，義兄弟姉妹などの血のつながりのない間柄も指し，その言葉の意味するものは広い．そのなかでも，本論文では同じ親から生まれた子どもどうしという間柄のきょうだいに注目する[1]．

1.2　研究の背景

きょうだいについて扱おうと考えたきっかけは，日本におけるきょうだいに関する研究がまだまだ不足しているように思えたことにある．これは，きょうだいという間柄が自明なものであるがゆえに軽視されてきたことに加え，親などの同居家族との関係やきょうだいのパターンの多さなども影響して研究が困難であることなどが理由と考えられている（白佐 2006；磯崎 2019）．実際，性別や出生順位，人数の組み合わせだけでも，きょうだいのパターンが多く存在することがわかるだろう．

そもそも，日本において，きょうだいという存在はどれほどありきたりなものなのだろうか．子どもを生み終えた夫婦における出生子ども数の分布[2]をみると，年々緩

---

[1] 本論文では，性別や出生順位を区別しない兄弟姉妹を「きょうだい」と表記する．

[2] 出生過程がほぼ完結したと考えられる，結婚持続期間が15～19年の夫婦における，出生子ども数を指している．

やかな減少傾向は見られるものの，2021年では7割もの夫婦が2人以上の子どもを生んでいることが確認できる（国立社会保障・人口問題研究所 2023:56）．ここから，日本ではきょうだいを1人以上もつ子どもの数が多いということがわかる．それほど身近な存在であるにもかかわらず，磯崎（2016）が指摘するように，親子や夫婦についての研究に比べて数が少ない．ゆえに，改めてきょうだいについて研究することには意義があると考える．

多様なきょうだい関係の中でも，本論文では，大学生きょうだいの家事をめぐる関係に注目する．さらに細かく言えば,ここでは特に2人きょうだいに焦点を当てる．以下に，このような問いを立てるに至った背景を述べていく．

まず，大学生きょうだいに注目したのは，筆者自身が弟を持つ大学生であり，自分の同世代のきょうだい関係に興味を持ったためである．また，2人きょうだいに焦点を当てる理由としては，2021年に実施された第16回出生動向基本調査において2人きょうだいの割合が50.8%となっており,一人っ子も含めたきょうだいのパターンの中で2人きょうだいが最も多いということが挙げられる（国立社会保障・人口問題研究所 2023:56）．

そして，そんな両方が大学生の2人きょうだいが関わり合う場面として選んだのが，家事をめぐる役割分担についてだ．子ども時代の家事やお手伝いに関する調査において，対象者の半数以上が子どもの頃に日常的に家事やお手伝いをしていた期間があると答えた(福井 2022)．また，同調査において，どの年齢層でも一定数家事やお手伝いをしていることが確認できた．さらに，全体の傾向として女性の方が家事参加は多いものの，20代においては上の年代ほど性差が確認できなかったことから，今の子どもにとって，男性でも女性でも家事に参加することは珍しいことではないといえる．

家事は，人が生活を行ううえで必要不可欠な事柄であり，複数人で生活を行うならば，そこには役割分担が生まれる.その分担には,家族成員それぞれの生活や性格，親密さや誰が家事を行うべきかという規範など，さまざまな要因をもとにした交渉あるいは忖度が行われると考えられる．ただ，いつも家族全員が納得のいく結果になるというわけではなく，不満が生まれ，二進も三進もいかない状況になり，きょうだいや親子の関係に亀裂が生じてしまうことがあるのもまた事実だろう．ゆえに，子どもにとっても家事の役割は家庭生活において重要である．

きょうだいにおける家事の役割分担を見るにあたっては，きょうだい全員が同じ世帯である必要がある．これについて，実家を離れて大学に通う学生も多いが，大学生の約 6 割が実家から大学に通っているというデータもある（日本学生支援機構 2022）．このことから，大学生きょうだいにおいて，きょうだい全員が実家暮らしというケースも珍しいことではないことがわかる．

また，先ほど子どもにとって家事が身近であるということに触れたが，大学生に限定すると，実家に住んでいる大学生はあまり家事をしないという調査結果も出ている（藤田 2016）．ただし，同研究においては，大学生が家事の役割についてどう考えているかについては詳しく調べられていない．家事をしないことについて，忙しいことや，親から家事をするように言われないことが理由として見られたが，なかには家事をしようとする気持ちはあるものの，親の意向によって実現しないという学生もいた．

本研究で調べたいのはまさにそういった部分である．自身が家事についてどう考えていようと，ときにそれは親をはじめとする周囲の環境とぶつかってしまう．それらを踏まえ，そもそも自分の家事の役割についてどのよ

うに考えていて，それはなぜなのか，そしてきょうだいの家事の役割をどのように捉えているのかについて調べていく．

2　先行研究の検討

2.1　青年期のきょうだい関係に関わる要因

前章で，日本におけるきょうだい関係についての研究の不十分さに触れたが，もちろん研究がないわけではない．そこで，まずは青年期のきょうだいについての知見について整理したい．さらに，本研究が家事をテーマとしていることから，家事に関する研究についても整理する．

先行研究から，青年期のきょうだい関係に関わっている要因としては，主に自身ときょうだいの性別や出生順位，そして親からきょうだいへの態度が挙げられることが多かった．そこで，本節ではその 3 つの要因についての知見を確認していく．

2.1.1　自身ときょうだいの性別

まず，性別に関して，きょうだいの組み合わせが男女か同性かにかかわらず，自身もしくはきょうだいが女性である場合には，男性の場合よりも親和的なきょうだい関係を築きやすいことが指摘されている(磯崎 2007; 森川 2014).

また，NHK が 2022 年に実施した調査によると，中高生の子を持つ親では「男らしく，女らしく」育てることに父親の 63%，母親の 43%が賛成していた（村田 2023). また，同調査で子どもに対して「男・女だから〇〇しなさい」と注意することがある人は父母ともに 3 割ほど存在し，親の性別や子の性別によっても「子どもで気になること」「つい，子どもにしてしまうこと」の種類と数値

に差があった．ここから，子どもの性別によって親の態度が異なってしまうことがあるというのは珍しいことではないということがわかる．

これらのことを踏まえ，本研究では大学生の2人きょうだいのなかでも，特に異性きょうだいに限定して調査を行いたい．性別が異なるきょうだい，すなわち「姉弟」と「兄妹」のケースに限定するのは，特にきょうだいの性別の違いによる差に注目しようと考えたためである．性別が違っていながらも，一方は男性が年上でありもう一方は女性が年上であるという意味で対の関係になっており，その組み合わせの違いがどのような差を生み出すかを検討したい．

2.1.2　出生順位

次に出生順位について，第1子の方が第2子よりも，きょうだい関係を対立的だと捉えており，これは第2子が第1子をモデリングして，行動をまねることによって衝突が生じていることが背景にあるのではないかということも推測されている（森川 2014）．

また，親にとって第1子の育児は試行錯誤であり，その第1子を踏まえて子育てを行える第2子以降は扱い方が異なってしまい，それがきょうだい関係に影響を及ぼすとも考えられている（荒賀 2009）．

さらに，日本では伝統的に「長幼の序」「長男重視の子育て」「男尊女卑」といった規範に基づいた子育てが行われてきた．近年はその規範が薄れてきているとされているが，実際には依然きょうだいの年齢や性別がきょうだい関係を規定している要因である可能性があることや，規範が薄れることで逆にきょうだい関係のバランスが崩れてしまうということが言われており，性別や出生順位はきょうだい関係を規定する中心的な要因といえる（白佐 2004；荒賀 2009）．特に異性の2人きょうだいを対

象とする中で,「上の子」か「下の子」かによって自分の考え方や親からの態度が変わるか，そしてそこに性別が絡む場合にはどうなるのかという部分に注目したい．

2.1.3　親の態度

ここまで見てきたように，きょうだい関係に関する中心的な要因として,性別や出生順位が挙げられるのだが，それらの多くは，親の態度を通して子どもたちに影響を与えている．実際に，20 歳前後の男女 10 人に対して行われた面接調査において，きょうだいとの関係について尋ねたところ，自分がきょうだいや親子の間でどのような役割を担うのかということについては両親の影響が大きいということが語られた（柴田 2015）．それほどまでに，家庭での子どもの役割分担において，親との関係は重要であると考えられる．

また，親がきょうだいに対して異なる扱いをすることにより，子どもがきょうだいに対して劣等感や敵意といった感情を体験することも分かっている（弘田 2009）．

これらのことから，きょうだいと親との関係を見ることによって，きょうだいへの態度が形作られている部分があるのではないかとも考えられる．つまり，きょうだい研究においては，親の考え方や言動を把握する必要性があるといえる．

2.2　家庭における家事分担に関わる要因

次に，家庭内の家事分担についての研究を見ていくのだが，研究対象を夫婦としたものが圧倒的に多い．したがって，まずは夫婦における家事分担についての知見を確かめたい．

前提として,夫婦の家事分担に関する研究といっても，特に「男性（夫）の家事参加」に注目したものが多い．これは，そもそも基本的には女性が家事を担っていると

いう現状があるためだ．

総務省（2022）によれば，週全体の家事関連時間を男女で比べると，2021 年度では男性が 51 分なのに対し，女性が 3 時間 24 分と，男女の間で 2 時間 33 分もの差がある．2001 年では男女差が 3 時間 3 分だったことと比べると，その差は縮小してきているが，依然として女性の方が家事を担っている現状があることがわかる．そのような背景があるため,「どうすれば男性が家事役割を担うか」という問題意識を持った研究者が多い．

夫の家事参加については，主に 6 つの仮説[3]に基づいて研究が蓄積されている．簡単に言えば，夫婦間の社会的資源，労働時間，関係性や規範などが，夫の家事・育児分担を左右するのではないかというものである．研究によっては，これらの仮説は支持されたりされなかったりとまちまちであるが，関連研究をレビューした工藤寧子（2016）によれば，概して，妻の収入の高さや夫の労働時間の短さ，子どもの年齢の低さ，妻の職場環境と妻の仕事への夫の理解が，夫の家事・育児分担を増加させていることがわかる．その妻の就業選択や就業形態については，夫婦の性別分業意識が関わっており，男女ともに家事労働を女性の役割と考えている傾向にある現状においては，どうしても女性側の家事労働が増えてしまい，それが問題となっている．

以上から，夫婦においては，資源配分と規範が主な構造的要因とされていることがわかる．しかし，これらの要因は大学生きょうだいにおいては当てはめることができない．同じ大学生どうしということで，学歴による差

[3] 6 つの仮説とは，「相対的資源仮説」「時間制約仮説」「イデオロギー仮説」「ニーズ仮説」「代替資源仮説」「情緒的関係仮説」のことを指す（労働政策研究・研修機構　2007）．

は見られないし，働くといってもアルバイトなど，あくまでも学業の合間を縫ってのものであり，個人としての年収に大きな開きをもたらすものではない.そうなると，大学生のきょうだいの間では，いったい何を参照して，誰がどのように家事をするかを考えているのだろうか.

そこで考えられるのは，夫婦の家事分担の場合でいう性別分業意識のような，規範を参照しているのではないかということだ．先に述べたように，きょうだい関係には性別や出生順位が関連しており，特に親からの扱いの差となって表れることがある．仮に,「男は仕事，女は家庭」というような性別に関する規範を参照して両親が子育てを行っているとすれば，それが子どもたちにも影響しているということは十分に考えられる.

したがって，本研究では大学生きょうだいが家事に対するお互いの役割に関して，すべきこと，しなくてもよいことを考える際に，特に性別と出生順位に関する規範に着目することとする．その際，自分ときょうだいがそれらの規範をどう考えているかだけではなく，親がそれをどう考えているのかについても見ていく.

以上より，複数の規範の関係に着目することになったわけだが，さまざまな規範と，それを人がどう捉え，関係に反映させているのかを調べるためには，どのように考えればよいだろうか．この疑問に対して，本研究では「社会学的アンビバレンス」という概念を枠組みとして使用することを試みる．次章では，この概念について詳しく説明していく.

3　理論的枠組み

3.1　Mertonらによる社会学的アンビバレンス概念

前章を踏まえ，本研究ではきょうだいの関係を捉える理論的枠組みとして,「社会学的アンビバレンス」という

概念を用いる.「アンビバレンス」という言葉は,「相反する感情を同時に抱く」という心理学的な意味で使われることが多いが,本論文で用いる「社会学的アンビバレンス」は,それとは一線を画す.そもそも,「社会学的アンビバレンス」という概念は,1963 年に Merton らが提唱したものであり,広義には「ある社会の中の一つまたは一連の地位に割り当てられた態度,信念,行動に関する矛盾した規範的期待」を指し,狭義には「単一の社会的地位の単一の役割に含まれる,矛盾した規範的期待」を指している(Merton & Barber 1963).

Merton らは,役割葛藤,つまりある役割が個人に矛盾した要求をし,その結果葛藤を感じてしまうというような状況に目を向けている.この役割葛藤が起こってしまうのは,規範や制度が対立しているためである.さまざまな規範や制度は必ずしも首尾一貫したものではなく,さらにある規範や制度に従おうとしても別の規範や制度から逸脱してしまうこともあり,社会の構造にはそのような矛盾が内在している.そのような構造的な矛盾を,「社会学的アンビバレンス」と呼んだ.

3.2 Connidis らによる概念の修正

以上が Merton らによる社会学的アンビバレンス概念だが,そこに重要な欠点があると指摘したのが Connidis と McMullin だ(Connidis & McMullin 2002).その重要な欠点とは,規範のもとでの個人の能動性に注意が払われていない点である(Connidis & McMullin 2002).Merton らの考えは,競合する役割の矛盾を強調したものだったが,その考え方では,ある規範の対立のもとにさらされる人々は,皆が同じように社会学的アンビバレンスを経験するという見方ができてしまう.

それに対して Connidis らの考えは,ある役割を無視してしまえば矛盾する期待に引き裂かれる経験も減るよ

うに，構造的な矛盾をどのように経験するかは，個人が規範をどのように解釈し，何を行おうとするかによるというものだった．Connidis らは，「何かをしようとする個人の働き」（いわゆる agency）に着目して，人が何かをしようとすることによって，はじめて構造的な矛盾にぶつかり，社会学的アンビバレンスを経験するのだということを強調した．

そして本論文では，Connidis らによって修正された社会学的アンビバレンス概念を理論的枠組みとして使用する．本論文では，大学生きょうだいの家事をめぐるやり取りについて，性別や出生順位に関する規範に注目して探ろうとしていた．しかしながら，それらの規範は必ずしもすべてが首尾一貫しているとは限らない.たとえば，長女は年長者ということで自分の意思を通しやすくなる一方，女性ということで自分の意思に反して家事役割を求められることがあるかもしれない．複数の，ときに矛盾した規範がある中で，誰がどうすべきか，どう自分の主張を通そうとしているかを見るにあたって，規範が対立しているという前提での社会観を取る社会学的アンビバレンス概念を枠組みとして用いることが向いているのではないかと考えた．そのなかでも Connidis らによって修正された概念を用いる理由は，規範を絶対のものとして捉えているのではなく，個人の能動性にも焦点を当て，さまざまな構造の中で個人が意思を持って選択しているということを重要視しているためである．

3.3　得られる示唆

以上から得られる示唆は，①複数の規範が求める行動，たとえば性別に関する規範が求める行動と，出生順位に関する規範が求める行動は，矛盾してしまう場合があること，②ただし，それを「矛盾している」と経験するかどうかは,家事を誰がどのように行うべきかを考える際，

きょうだいそれぞれがそれらの規範をどのように受け止めるかによること，というものである．

これらを踏またうえで，本研究では両方が大学生かつ異性の２人きょうだいに対してインタビュー調査を行うこととする．次章以降ではその調査概要と結果について述べていくこととする．

4　調査概要

4.1　方法

本研究ではインタビュー調査を行うのだが，きょうだい間の家事の役割分担をめぐる関係に注目するために，これまでに述べたとおり,「両方が大学生かつ実家に住んでいる，性別の異なる２人きょうだい」を対象とする．

そして，上記に合致する２組のきょうだいから協力を得ることができた．対象者の募集には，きょうだいを持つ筆者の知り合いに声をかけ，その人を通じてきょうだいにも調査の協力を依頼する形を取った．そのため，どちらの組もきょうだいの片方とは親密な仲である一方で，もう片方とは初対面であった．

本研究では，それぞれの組のきょうだいの両方にインタビュー調査を行った．ある出来事の経験の仕方はきょうだいそれぞれの視点によって大きく異なることが予想されるためだ．実際に，Connidis（2007）も自身が修正した社会学的アンビバレンスを概念枠組みに用いて，2家族のきょうだいに対するインタビュー調査を行ったのだが，そのなかで，1組のきょうだいにおいてきょうだいそれぞれから話を聴き，その関係性を捉えたうえで類似点と相違点を整理することの重要性を示した．この先行研究も参考にし，きょうだい両方に対して同じテーマについてインタビューをするという手法を取った．

対象者には事前に Google フォームを用いてフェイス

シートを記入してもらった．そこで得られた基本情報を踏まえて，Web会議ツールであるZOOMを用いたオンラインでの半構造化インタビューを行った．インタビュー内容は相手の了承を得たうえで，ZOOMの録画機能を用いて記録した．また，必要に応じて後日追加の質問にも応じてもらい，1人につき合計して1時間程度のインタビューを行った．フェイスシートでは，氏名や生年月，同居家族などの基本的な情報と，対象者のきょうだいに対する印象やきょうだいとの印象深いエピソードといったきょうだいに抱くイメージを簡単に尋ねた．

インタビューでは，最初にアイスブレイクとしてフェイスシートで回答してもらったきょうだいに抱くイメージについて触れ，その後両親やきょうだいとの関係と家事についての質問をしていった．その際，「なぜそう考えたのか」「なぜそのように行動したのか」という部分を深掘りしていった．特に性別や出生順位，親の考え方や態度に関する語りが見られた場合には詳しく尋ねた．

また，きょうだい両方にインタビューを実施するなかで，先にインタビューをした方から聞いた情報を，了承を得たうえでもう一方のインタビューで話題に挙げて質問をするという手法も取った．これは，同じ出来事・話題についてきょうだいそれぞれがどう考えているか，その違いと要因を明らかにしたいと考えたからである．なお，話題に挙げる際は，回答そのものやきょうだいの仲への影響を鑑み，きょうだいが「どう考え，感じていたか」という部分については伝えず，単に「このような話題が出た」という部分だけを使用するようにした．

得られたインタビュー結果の分析に際しては，まず逐語録を読み込むところから始めた．そして各家庭の家族成員の基本情報を整理し，そのうえで，規範の矛盾を経験していると考えられる語りをリストアップした．そのような矛盾は，それぞれの規範をどのように解釈してい

るからこそ経験しているのかを，回答者の家族の情報やきょうだいへの見方に照らして分析した．

4.2　インタビューの概要

先に示したように，本研究ではきょうだいがお互いの家事役割に対してどのような見方をしているかを知ることと目的としている．そういったことを調べるためには当人の理解や説明のしかたを調べる必要があり，インタビュー調査を行うに至った．

インタビューの結果は，家事の遂行状況，きょうだいの家事に対する評価，そしてそれを社会学的アンビバレンスの視点から整理した内容の順で記述していく.「家事の遂行状況」では，各家庭で誰が主に家事を行っているのか，そして対象者自身はどの程度家事を行っているのかを把握する.そして「きょうだいの家事に対する評価」では，対象者からみたきょうだいの家事に対する評価，特に不満に感じていた点を見ていく．そして，それを社会学的アンビバレンスの視点から，規範が矛盾していることが示唆される状況を抜粋して整理する．

なお，インタビュー内容に関しては，重要だと思われる内容についてはインタビューの会話からそのまま引用し，それ以外は筆者がまとめて記述する形をとる．調査対象者の基本情報については，表 1 に記したため参考されたい．

表 1. 調査対象者の基本情報

	アヤセきょうだい		イクタきょうだい	
対象者の表記	アヤセ兄	アヤセ妹	イクタ姉	イクタ弟
学年 年齢	4 年生 21 歳	1 年生 19 歳	4 年生 22 歳	1 年生 19 歳
同居家族	母親・父親		母親・父親	
備考	筆者の友人	初対面	筆者の友人	初対面

5 調査結果

5.1 家事の遂行状況

ここではまず，対象者が語った，それぞれの家庭の家事の遂行状況を記していく．

5.1.1 アヤセきょうだい

まずはアヤセきょうだいの家庭から確認していく．アヤセ家は，アヤセ兄，アヤセ妹，父，母の 4 人家族である．父は会社員，母はもともと専業主婦だったが，現在は週に 2，3 回小学校の先生の手伝いをするパートタイム労働者でもある．

そんなアヤセ家では，基本的に家事全般を母親が担っており，父，兄，妹はほぼ家事をしないという．アヤセ兄は主だった家事をする時間帯に家にいないことも多く，なかなか家事ができていないようだが，家事をしなければいけないという考えは持っていた．

（アヤセ兄）

――家事の現状について，何か思うところとかはあったりしますか？

アヤセ兄：まああれですね．もちろんもっと手伝わなあかんなーと思ってるけど……．

――その「手伝わなあかんなー」っていうのはどういった理由で？

アヤセ兄：うーん，やっぱその，小・中学生はまあ，子どもやから……なんていうのまあ，親のお世話になるというか，親に手間かけさせるのはしゃあないと思うけど，高校生，大学生にもなったらある程度なんていうかな，自分の身の回りのことを自分でやるだけじゃなくて，多少家族に関することもやらなあかんなーと．なんていうか，それが理想やろなーって勝手に俺の中である．思ってるけど，なかなかそれができてないって感じやな．

アヤセ兄は自身がもっと家事をした方が良いと考える理由について，自身が大学生であることに触れながら語ったが，そこには年齢規範ともいえるようなものが見えた．

アヤセ妹についても，ほとんど家事はしないが，食事ができた時の配膳やゴミ出し程度は行っているという．また，母が家におらず，自分が家にいるときには，母から頼まれて洗濯物を干したり取り込んだりすることはよくあるとのことだ．アヤセ妹も現状あまり家事はできていないが，アヤセ兄と同じくもっと家事をしなければならないと考えている．

（アヤセ妹）

――ご自身としては，家事というか，家のことをしなければいけないなみたいな意識があったりします

か？

アヤセ妹：はいあります．

――それは理由とかありますかね？

アヤセ妹：私がお風呂洗いとかご飯作ったりとか掃除機かけたりをほんとにほとんどしないんで，今後お母さんが1日家開けるとなったときに何もできなくなっちゃうんじゃないかなと思ったりしてるので，ご飯作るくらいはやらないといけないのかなとは思ってます．

――なるほど．お母様が基本的に家事なされてるってことなんですけど，その状況について何か思うところはありますか？

アヤセ妹：そうですね．きょうだい2人とも大学生なのに家事任せっきりなのはすごい申し訳ないなとは思ってます．

アヤセ妹が家事をしなければいけないと考えている理由は，今後母親が家を空けた際に自分が何もできないことを危惧してのものだった．また，子どもが両方大学生なのに母親に家事をやらせている状況を申し訳なく思っているということも語られ，アヤセ兄と同じく大学生であることを引き合いに出す形で反省の念を示していた．

また，会社員である父は基本的に家事をしないということであった．これに対してアヤセ兄は，父が還暦を過ぎていることに触れながら，昭和生まれの男性が亭主関白な態度をすることを「しゃあない」というように語った．このことから，アヤセ兄は今の時代と過去とで性別

に関する規範が変わっていること，そして父は過去の規範に従っているということを認識しているということが読み取れる．

以上がアヤセ家の家事の実施状況となっている．

5.1.2　イクタきょうだい

次に，イクタきょうだいの家庭を見ていく．イクタ家は，イクタ姉，イクタ弟，父，母の4人家族である．父は会社員で，母は美容室を営んでいる．なお，イクタ家の母ももとは専業主婦だったが，数年前に祖母が倒れたことによって,祖母の美容室を継いだという背景がある．

そんなイクタ家の家事事情だが，アヤセ家同様に，母親が家事全般を担っていることが語られた．ただ，アヤセ家と異なるのは，母以外の家事の実施状況がバラバラであるということだ．イクタ弟は全く家事をしていないが，イクタ姉はかなり積極的に家事を行っており，父も多少ではあるが家事を行っているということだった．

イクタ弟は家事をまったくしないということだったが，その理由として語ったのは，単純に「面倒くさい」というものと，部活をやって家に帰ってきたときには疲れ果てており，何もする気力が起きないというものだった．そのうえ，イクタ弟は両親から家事をするように言われることもめったにないという．

イクタ姉は，基本的に家事を母親がしているとしたうえで，まだできていない家事を見つけた時には「気づいたときに私がしている」と語った．家事を始めたきっかけとしては，コロナ禍で家にいる時間が増え，暇であったことと家の汚れが気になるようになったことがあるという．そのなかで，イクタ姉は自身が家事をする理由を複数挙げていた．

（イクタ姉）

――気づいたときは自分が家事をするってことやけど，それは理由とかある？

イクタ姉：最初の方は，自分も大きくなって，親も歳いくやんか．母親も働いているしさ，なんか母親が仕事で疲れて帰ってきてるのに全部のことやらすの，かわいそうやなーって思ってるのはあった．けど，弟はその気遣いができへんから，おいおい，ってなる．ただ，今は自分中心やなって思われるかもしれないんですけど，普通に汚い空間にいるのが嫌っていうだけです．

――なるほど.「自分も大人になって，母も歳をとって，仕事がしんどそうやのに家事全部やらすのはかわいそう」っていうのと,「散らかっている・汚い状態が嫌」っていうのは，どちらの想いの方が大きいですか？

イクタ姉：やっぱり自分が快適に過ごしたいっていうのが 7 割ぐらい．

――今，家事やる理由として後者の方が 7 割くらいって言ってたけど，感情が表れた順番としてはどっちの方が先？

イクタ姉：最初の頃は母の負担が大きいのが気になって家事やってたところはあってん．けど，弟の話にも出たように，家事について怒られているうちに，母のため，家族のためっていうより，自分のために家事をするように切り替えたかな．

ここでは，イクタ姉は自分が家事を行う理由として，

母親を気遣う面と自分が散らかっている状態を嫌う面があるとした．最初は前者の気持ちが強かったが，ある出来事によって「自分のために家事をする」という心持ちに切り替えたという．そのある出来事とは,「家事をしようとして母に怒られる」というものだ．イクタ姉が家事をしようとすると，母から「やらなくていい」と言われることが度々あったそうで，それには主に 2 つの理由があった．1 つは，イクタ姉の家事が雑であるというものだったが，もう 1 つの方は，イクタ姉がイクタ弟に家事をさせようとすることについてだ．具体的なエピソードとしては，イクタ姉が洗濯物を回そうとしたときに，イクタ弟の部活で汚れた服が積みあがっていることに気づき，イクタ弟に対して服をネットに入れて洗濯機に入れるよう指示したところ，母から「弟にそんなことをやらすくらいなら（家事を）やらなくていい」と怒られたというものだ．つまり，イクタ姉にとってはもともと母への気遣いと家の汚れが気になることが家事遂行の理由であったが，母の弟びいきによって母自身から否定されるという矛盾を経験したことで，家事をする理由の比重に変化が生まれたということだ．イクタ弟からはそういった心境が語られることはなかったので，イクタ姉とイクタ弟の間で家事に対する認識に大きな違いがあることが認められた．

また，イクタ姉の語りの中で「母への気遣い」が出てきたが，これにはもともと専業主婦だった母が，諸事情で自営業を営むことになり，家事と仕事を両立させようとして多大なストレスを感じているという背景がある．父が少しだけ家事をしている理由も，母の仕事が忙しくなった頃に，母から「家事をしろ」と強く怒られたことがあった．

5.2　きょうだいの家事に対する評価

次に，きょうだいの家事の実施状況についての対象者の評価を記していく．なお，評価に関しては，不満という形でよく語られたため，特に不満について記述する．

5.2.1　アヤセきょうだい

アヤセきょうだいはそもそも家事をすることが少ないため，お互いに対しての不満もあまり見られなかった．しかし，まったくないということではなく,「リビングの片づけ」や「配膳」についてはお互いに思うところがあった．

まず,「リビングの片づけ」から見ていく．これは，アヤセ兄が鏡や髭剃りなどの身だしなみを整える道具を，リビングの机に置きっぱなしにしてしまうことに対して，アヤセ妹が不満を感じているというものだ.アヤセ兄は，物を置きっぱなしにしているとはいえ，定位置からすぐ近くであるし，範囲が狭いということで対して邪魔になっていないと主張している．しかし，アヤセ妹からすれば，兄の肌に触れたものに抵抗感があるらしく，みんなが食事をするような場所にそれを置いておくことに否定的であった．

次に,「配膳」についてだが，こちらは両者の語りから見ていく．

（アヤセ兄）

アヤセ兄：あー．食卓の準備については（妹に）怒られることがあるな.「ご飯できた」となっても，その，（自分が）携帯いじったりとかしとって運ばなくて，妹が先に運んどって,「兄ちゃんも運んでや」って言われたりとか.（妹に）「食べるの遅いな」っていう話をしたら，カウンターとして「兄ちゃんも全然配膳せえへんやんな」みたいになったりしたかな．

（アヤセ妹）

アヤセ妹：ご飯の配膳が私と兄両方もしいるときなら，ちょっと一緒に運ぶの手伝ってほしいなって思ったりはします．

――それは，お兄ちゃんも妹もおるのに，自分ばっかり配膳するっていうところに不満があるみたいな感じですかね？

アヤセ妹：そうですね．

語られた内容は，アヤセ妹はアヤセ兄に配膳を手伝ってほしいが，アヤセ兄はなかなかそれを実行してくれないということで不満に感じているというものだった．ここではアヤセ妹からアヤセ兄への不満が語られたが，一方でアヤセ妹は自分ばかり母から家事を頼まれることについては特に不満に思うことはないという．このことについて，アヤセ妹は，自分が母から洗濯物を取り込んでほしいなどと頼まれる場合には，たいていアヤセ兄は家にいないが，配膳時には自分とアヤセ兄の両方がいる場合があり，そこでアヤセ兄が何もしないでいると「いっしょに運ぶのを手伝ってほしい」と思うのだという．

ここで，アヤセ兄は「家事をもっとしないといけない」と考えていたということを思い出してほしい．アヤセ妹が配膳について不満を抱くのはアヤセ兄が家にいるタイミングだけであり，その場合，アヤセ兄は家事に参加することができるはずだ．この点については，アヤセ兄は以下のように語っている．

（アヤセ兄）

アヤセ兄：俺の深層心理でもしかしたら，父親の亭主

関白な部分を受けてしまって，たとえばその配膳に関しても「妹がやってくれてるから手伝わんでいいわ」と思ってるかもしれへん．

すなわち，アヤセ兄が家事に参加できる場合にもそうしない理由として，父の態度を見てそれが自分にも反映されている可能性があるということを自分から語ったのだ．

このように,「リビングの片づけ」と「配膳」についての不満がアヤセきょうだいそれぞれから語られたが，どちらも強い怒りを感じているといった様子ではなく，それが不仲につながるといったことも見られなかった．

5.2.2　イクタきょうだい

イクタきょうだいでは,アヤセきょうだいとは違って，きょうだい間でかなり強い不満が見られた．それも，イクタ姉からイクタ弟に対してのものばかりだった．それが語られた話題は，主に「洗濯物」「朝の洗い物」の 2 つだった．

「洗濯物」については先に示した，自分の汚れた洗濯物をほったらかしにするイクタ弟に対しての不満である．イクタ姉がイクタ弟に対して言うのは，あくまでも「ネットに入れて洗濯機に入れてほしい」というものだが，イクタ弟はなかなかそれをしてくれず，そのうえ母親までイクタ弟の味方をしてイクタ姉の行動を否定するため，両者に対して強く怒りの感情を抱くとも語られた．

ここで触れておきたいのが，このイクタきょうだいに対する母親の態度の違いだ．具体的には，イクタ弟に対しては非常に甘いが，イクタ姉に対しては常に否定的な態度を取り，イクタ姉のすることにことごとく食って掛かるというものだ．この態度の差について，イクタきょうだいがどのように捉えているかを確認したい．

（イクタ姉）

――親が弟に甘いことについては，何かこう要因みたいなのがあったりすると思う？

イクタ姉：やっぱりたぶん，女親は男の子の方が目をかけて育てんのはまあ世間の一般常識としてあるから，うちの親もその延長線上なんかなと思う．

（イクタ弟）

――ご自身とお姉さんとの間で，ご両親からの態度が違ったりとかありますか？

イクタ弟：結構ありますね．（中略）これもまた何か下の子可愛さかなと思ったりしてます．

――そしたら，両親が姉に比べて自分に甘いのは何でだと思いますか？

イクタ弟：あー．長男というのと弟という立場が関係していると思います．

――うんうん．そのまま続けて聞くけど，自分とは逆に，両親が姉に対しては色々言うのは何でだと思いますか？

イクタ弟：長子かつ女だからやと思います．特に母は女という立場で苦労したから特に酷いと思います．

イクタ姉は，「世間の一般常識」という言葉を使い，母が男性である弟に目をかけて育てているのではないかと考えていた．イクタ弟も，親の態度に対して，「長男かつ

弟」「長子かつ姉」という性別や出生順位が関係していると推測していた．イクタ弟自身も，両親が自身に甘いところがあることを自覚しており，姉との態度の違いも日々のさまざまな場面で感じられるようだ．両親にインタビューをしていないため断言はできないが，きょうだいから得られた情報から，イクタきょうだいの母は，性別に対して何かしらの相当強い意識を持っており，それがきょうだいに対する扱いの差に表れている可能性がある．

このような母からの態度の差を踏まえたうえで，きょうだい間のもう一つの不満についても見ていく.「朝の洗い物」に関しては，母が朝早くに仕事に出る際に朝ご飯を準備していくことがあるということなのだが，イクタ弟がご飯を食べた後に後処理をしないことに対してイクタ姉が不満を感じているということだった．ここでも，イクタ弟に自分の後片付けをしてほしいと思っているイクタ姉だが，それが叶わずに結局自分でしてしまうということが語られた．これについて，イクタ弟がどのように捉えているかも確認したい．

（イクタ弟）

イクタ弟：自分が（大学の授業が）2 限始まりとかやったらうちの母親がもうお店の方行っててていないんですよ．で，自分でご飯食べて自分で洗っていかなあかんですけど，時間ギリギリまで寝てしまって洗えずに行くとかがよくあるんですよね．そうしたらうちの姉から「お前洗っていけよ」っていうふうに言われたっていう．……でも洗っていけよと言いつつも，家帰ったら姉が洗ってくれてるって感じなんですよ．それに甘えて，またやっちゃうんですよ．

――なんだかんだ言いつつもやってくれるところが

あると？

イクタ弟：そうですね．結構甘いところはあります．

親がイクタ弟に対して甘いというのは前述したとおりだが,その甘やかされているという意識があるためか,イクタ姉も自分に対して甘いのではないかと考えているということも明らかになった．実際にはイクタ姉は腹を立てており，散らかっている状態に耐えられないから代わりにやっているだけなのだが，それをイクタ弟は「なんだかんだ言って姉もやってくれる」と認識しており，それに甘えているのだと語った．

5.3　社会学的アンビバレンスの視点から

以上，アヤセきょうだいとイクタきょうだいそれぞれの家事の遂行状況とそれに対する不満を見てきた．ここではそれを，社会学的アンビバレンスの視点から整理する．具体的には，各きょうだいの語りから，規範が矛盾していることが示唆されている状況を抜粋する．

5.3.1　アヤセきょうだい

まず，アヤセきょうだいにおいては,「配膳」をめぐって規範の矛盾が発生していた．アヤセ妹は，母ばかりが家事をしている状況について,「きょうだい 2 人とも大学生なのに家事任せっきりなのはすごい申し訳ない」と語っていた．ここから，大学生は自分のことは自分ですべきという規範があることがうかがえ，だからこそ自分自身も兄も家事を自分でやるべきだと思っている．アヤセ兄も同様の規範を意識していたが，結局アヤセ妹に食事の配膳を任せてしまっていた．それについては，アヤセ兄自身が，亭主関白な父の影響を受けて自分も性別分業的な意識をどこかで持っているのかもしれないという

ように語っていた．つまり，アヤセきょうだいはともに年齢に関する規範（大学生くらいの年齢の子どもはどうあるべきか）を参照して家事をしなければならないと考えるなかで，性別規範によって男性の兄だけが免責されているという矛盾があった．またその矛盾は，アヤセ妹が「兄にも配膳をやらせよう」と試みることによって，余計に顕在化していた．

5.3.2　イクタきょうだい

次にイクタきょうだいにおいては,「洗濯物」や「朝の洗い物」について語るなかで，規範の矛盾があらわれていた．イクタ姉は，アヤセきょうだいと同様に,「大学生なのだから自分のことは自分でするべき」というような規範を参照して，実際に家事を積極的に行っており，弟も家事をするべきだと考えていた．弟に求める家事といっても,「洗濯物をネットに入れる」「洗い物を水につける」といった簡単なものであったが，イクタ弟はなかなかそれらを実施しない．これについて，イクタ弟自身からは，単に「面倒くさいから」「疲れているから」という理由が挙げられ，性別や出生順位を理由に家事をしないというようなことは語られなかった．しかしながら，母が性別や出生順位に関して強い規範意識を持っており，それが，弟が家事をしなくてよい理由となっていた．つまりここでは，イクタ姉が参照している年齢に関する規範と，母が参照している性別や出生順位に関する規範が矛盾しているといえる．規範をもとにした母の考えは，イクタ弟の行動を通す形でイクタ姉とぶつかり，アヤセ家の場合と同様に,「弟にも家事をやらせよう」と試みることによって，余計に顕在化していた．

5.3.3　まとめ

以上から，きょうだいが家事をめぐって規範の矛盾を

経験することがあるということが示された．その際，程度は違うものの，2 組ともやはり性別や出生順位に関する規範が持ち出されていた．さらに，イクタ家のように親が規範を強く意識し，それがきょうだいに対する態度に明確に表れることが，きょうだい間の不満につながる可能性があるということも明らかになった．

また，性別や出生順位と同じくらい，もしくはそれ以上に回答者が重視していたものとして,「大学生になったら自立しないといけない」というような年齢規範があることも新たに判明した．どちらのきょうだいにおいても年齢規範が「家事をしなければならない」という考えを生む要因となっており，それが性別や出生順位に関する規範とぶつかる形で，きょうだいに対する不満が生まれていた．ゆえに，これも重要な規範であるといえよう．

6　考察

6.1　参照されていた規範

ここまで，2 組のきょうだいの家事に関する語りを確認してきたが，本章ではその結果を，社会学的アンビバレンス概念をもとに，規範に注目して考察していく．

まず，きょうだいの家事分担を考えるうえで参照されていた規範は，①性別規範，②出生順位に関する規範，③「大学生」であることに関連する年齢規範の 3 つであった．

①の性別規範は,「女性が家事をするべき」というもので，どちらのきょうだいにも見られた．特に，男性が家事を「しない」ことの背景にこの規範が働いていると考えられる．

②の出生順位に関する規範は，イクタきょうだいにおいて顕著に見られた．それも，きょうだい自身が参照しているというよりは,母が強く意識している形であった．

そしてそれは，イクタ弟が家事をしないという状況につながっていた．

①と②については，先行研究を支持する結果であり，やはり「長幼の序」「長男重視の子育て」「男尊女卑」といった，きょうだいの出生順位や性別に関する規範が今なお残っており，きょうだい関係を規定している可能性が高いということが示された．また，2 組のきょうだいの間でこれらの規範が参照される程度は異なっていた．アヤセきょうだいとイクタきょうだいの大きな違いとして，親がきょうだいに対して扱いを変えるか否かという点があった．ここから，親がどのような考えを持って，どのような態度をきょうだいに対して取るかという点によっても左右されると推測される．この点についても，親の態度がきょうだいの関係を規定する要因であるという先行研究を支持する形となった．

一方，③の年齢規範は，先行研究からは予想できなかったが，アヤセ兄，アヤセ妹，イクタ姉の 3 人が参照していたほどの重要な規範であった.「大学生」という年齢段階を持ち出し,「自分のことくらいは自分でするべき」であるとし，それが家事をしなければならないと考える理由の 1 つとなっていた．また，①と②は親の言動を通してあらわれることがあったが，③についてはその通りではなかった点も興味深い点であった．

6.2　どのような場合に規範が対立していたか

次に，先に挙げた 3 つの規範が，それぞれどういった場合に対立していたか，言い換えれば，どのような場面で社会学的アンビバレンスが顕在化していたかを考察する．

規範の対立は,「①と③」そして「①・②と③」の間で見られた．

まず,①性別規範と③年齢規範の対立が見られたのは,

アヤセきょうだいであった．アヤセ妹は，年齢規範から大学生である自分も兄も家事をするべきだと考えており，普段はなかなか家事ができないものの，食事の配膳については実施していた．しかし，アヤセ兄は性別分業意識を持つ父の影響か，配膳をしてくれない．ここでは，性別規範によって兄だけが家事をしなくてもよくなっており，年齢規範との間で矛盾が生じてしまっていた．そしてそれが，きょうだい間の不満を生む要因となっていた．

次に，①性別規範および②出生順位に関する規範と③年齢規範の対立が見られたのは，イクタきょうだいであった．イクタ姉は，年齢規範から積極的に家事を実施しており，弟に対しても「自分のことくらいは自分でしてほしい」と考えていた．しかし，イクタ弟はなかなか家事をしてくれない．その背景には，イクタ弟自身というよりは，母の存在が強くあった．母は，きょうだいそれぞれの「長子かつ姉」「長男かつ弟」という属性を強く意識していた．その性別規範と出生規範が混ざったような考え方をもとに，イクタ姉には厳しく，イクタ弟には甘い態度をとることで，イクタ弟が家事をしなくてもよい状況を作り出していた．そこで，年齢規範との矛盾が発生していたのだ．つまり，一見すればイクタ姉とイクタ弟の間に発生している不満であるが，元をたどればイクタ姉と母との対立であるともいえ，親の態度がきょうだい関係をネガティブな方向に向かわせてしまっている 1 つのケースとなっていた．

7　結論

本論文では，社会学的アンビバレンス概念を用いて，規範に注目しながら，大学生きょうだいが世帯の家事に対するお互いの役割をどのように見ているのかを調べていった．その結果，性別や出生順位，年齢に関連した規範を参照して家事役割について考えていること，そして

その規範がときに矛盾することがあり，きょうだい間の亀裂を生む可能性があることが明らかになった.さらに，規範の対立はきょうだい間でのみ見られるのではなく，親子の間でも見られた．一見するときょうだい間での対立に見えても，実際には親が子どもの性別や出生順位によってきょうだいの扱いを変えることが，その根本的な原因となっていたケースがあった．ここから，きょうだい間の不満や対立を減らすためには，親が意識的に子どもの出生順位や性別によって扱いを変えないということが重要であるといえよう．

以上のように，家事という日常生活１つを切り取っても，社会学的アンビバレンスがきょうだい関係に作用して，その関係を左右しているということが明らかになった．また，社会学的アンビバレンスに関連して，触れておきたいことがある．岩間暁子ら（2022）によると，日本はその福祉や生活保障の在り方から家族主義や性別分業は維持されているものの，男性を介して企業が家族を支える企業福祉が衰退することで，既婚女性の就業の重要性が増している．また，岩間らは援助や同居といった親と成人子の関係について，父系優位を支える文化的規範や，男性稼ぎ主型の雇用社会制度，母系優位を支える男女平等を目指した法律や制度などが併存していることが，その予測を困難にさせ，交渉を必要とさせるとも述べている．ここから，日本の法律や制度といったシステム面でも，それが巡り巡ってきょうだいの関係に影を落としているといえる．言い換えれば，こうした構造がもとになっている社会学的アンビバレンスを防ぐことは難しく，人々は皆その状況を何とかやりくりしているのだといえよう．

最後に，本研究の限界について述べたい．まず，本研究の調査対象者は非常に限定的であり，個々から得られた知見を一般化することはできない．本論文で見たきょ

うだいというのは，無数にある「きょうだい」という関係のほんの2ケースに過ぎない．同性きょうだいをはじめとして，異父母きょうだいや血縁のないきょうだい関係についても触れることができていない．

さらに，きょうだいの親についてもさらに深く知る必要性も見えた．子どもから語られる親の像だけでなく，直接親からその考えを聞くことができれば，さらに深い考察が行えることだろう．だが，もちろんそれは簡単なことではない．本研究は社会学的アンビバレンスを用いたきょうだい研究の可能性を示した半面，その難しさを改めて確認させられた．

また，方法に関しても，インタビューの対象者が知り合いだったことや非対面のオンラインで行われたことの影響が考えられる．具体的には，どちらのケースも筆者がきょうだいの片方とは親密な仲であるため，オンラインでのインタビューでも信頼関係が築かれたうえでリラックスして受け答えができていた．しかし，きょうだいのもう一方とは初対面であり，その影響もあってか，緊張して口数が少なかったり，言いよどむシーンが多かったりした．そういった点で，得られる回答の質に差があったことには留意する必要がある．

最後になったが，本研究の結果は，今すぐにきょうだい関係をどうこうできる類のものではない．しかし，このような研究の知見が積み重なり，きょうだいが自分たちの関係を俯瞰してみることができるようになれば，より良い関係を築けるようになるのではないかと期待している．

[文献]

荒賀文子，2009，「現代社会におけるきょうだい状況の変化」藤本修編『きょうだい――メンタルヘルスの観

点から分析する』ナカニシヤ出版,44-53.

———, 2009, 「親子関係ときょうだい」藤本修編『きょうだい——メンタルヘルスの観点から分析する』ナカニシヤ出版, 58-66.

Connidis, Ingrid A., 2007, “Negotiating Inequality among Adult Siblings: Two Case Studies,” *Journal of Marriage and Family*, 69(2): 482-499.

Connidis, Ingrid A. & Julie A. McMullin., 2002, “Sociological ambivalence and family ties: A critical perspective,” *Journal of Marriage and Family*, 64: 558-567.

藤田智子, 2016, 「大学生の家事実践状況と母親の就業状況及び高校時代の家事実践との関連」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』67(2): 303-310.

福井航, 2022, 「子ども時代の家事・お手伝い経験を基にしたヤングケアラーの発見——＜ヤングケアラー＞という言葉を用いない調査を通じたヤングケアラー研究」『現代日本における世代間関係と性の規範(大阪私立大学文学部 2022年度社会学実習b報告書)』, 大阪市立大学大学院文学研究科 社会学教室, 32-40.

弘田洋二, 2009, 「きょうだい葛藤について」藤本修編『きょうだい——メンタルヘルスの観点から分析する』ナカニシヤ出版, 39-44.

磯崎三喜年, 2007, 「出生順位と性がきょうだい関係の

認知と自己評価に及ぼす影響」『国際基督教大学学報 II-B 社会科学ジャーナル』(61): 203-220.

———, 2016, 「きょうだい関係の意味するもの」『子ども社会研究』(22): 177-89.

———, 2019, 「きょうだい関係とは何か」『子ども社会研究』(25): 185-96.

岩間暁子・大和礼子・田間泰子, 2022, 『問いからはじめる家族社会学』有斐閣ストゥディア.

国立社会保障・人口問題研究所, 2023,『現代日本の結婚と出産——第16回出生動向基本調査(独身者調査ならびに夫婦調査)報告書』, 国立社会保障・人口問題研究所ホームページ, (2023年12月13日取得, https://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou16/JNFS16_reportALL.pdf).

工藤寧子, 2016, 「夫婦の家事分担に関する文献レビュー」『東北女子大学・東北女子短期大学紀要』(54): 58-64.

Merton, Robert K. & Elinor Barber, 1963, "Sociological ambivalence," Edward A. Tiryakian ed., *Sociological theory: Values and Sociocultural Change*, NY: Free Press, 91-120.

森川夏乃, 2014, 「家族システム論の観点から見た青年期のきょうだい関係に関する基礎研究」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』62(2): 133-143.

村田ひろ子，2023，「ジェンダーをめぐる中高生と親の意識」『放送研究と調査』NHK 放送文化研究所，73(6)：64-75.

日本学生支援機構，2022，『令和 2 年度学生生活調査報告（詳細版）』，日本学生支援機構ホームページ，（2023 年 12 月 13 日取得，https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_chosa/__icsFiles/afieldfile/2022/10/17/houkoku20_all.pdf）．

労働政策研究・研修機構，2007，「育児期における男性の家事・育児分担」『仕事と生活――体系的両立支援の構築に向けて』労働政策研究・研修機構ホームページ，183-201，（2024 年 1 月 3 日取得，https://www.jil.go.jp/institute/project/series/2007/07/prs7_11.pdf）．

柴田康順，2015，「青年のきょうだい関係とアイデンティティの関連――質問紙法、面接法を用いた検討」『大正大学大学院研究論集』39：39-52.

白佐俊憲，2006，「きょうだい研究の動向と課題」日本児童研究所編『児童心理学の進歩 2006 年版』金子書房：57-84.

白佐俊憲編，2004，『きょうだい関係とその関係領域の文献修正Ⅲ』川島書店.

総務省統計局，2022，『令和 3 年社会生活基本調査――生活時間及び生活行動に関する結果（結果の概要）』，総務省統計局ホームページ，（2024 年 1 月 3 日取得，https://www.stat.go.jp/data/shakai/2021/p

df/gaiyoua.pdf) .